の部では，全30巻1冊の巻頭部分がすべて掲載されている．次いで「附 江戸幕府借用関係文書」，「明治以降半井好和関連文書」，「『医心方』裏書」，「『医心方』紙背文書」のカラー図版がある．これらの鮮明な図版は今回初めて公開されるものばかりで，大いに参考になる．評者はとくに『医心方』裏書に興味が惹かれ，いくつかの新知見を得ることができた．コラムとして冨坂賢「『医心方』巻第八『天養二年加点識語』について」と國分梓（郡山市文化振興課）「東博本『医心方』の背記」について」の記述も挿入されている．

ともかく表紙からしてカラー図版が満載．国宝『医心方』好きは図版を眺めているだけでも楽しい時間が過ごせる．図版と添えられた翻字を対比しても何か気付くかも知れない．

（小曽戸　洋）

［東京国立博物館，〒110-8712 東京都台東区上野公園13番9号，TEL. 03（3822）1111，2022年2月，A4判，156頁，3,000円＋税］

岸本良彦 訳注
『ディオスコリデス 薬物誌』

2022年には，古代ギリシア・ローマの植物学・薬学に関する書物が相次いで出版される．京都大学学術出版会（西洋古典叢書）からはテオプラストス『植物誌』（小川洋子訳）の最終分冊に加え，ケルスス『医学について』（石渡隆司・小林晶子訳）も出版される予定である．こうした流れの先陣を切って出されたのが，今回のディオスコリデス『薬物誌』である．

ディオスコリデスは紀元後1世紀キリキアのアナザルブスに生まれたとされる医師である．ギリシアや小アジアなど各地を遍歴し，多くの薬草・薬物を収集し，『薬物誌』を著した．『薬物誌』のギリシア語原題の直訳は『医学材料について Περὶ ὕλης ἰατρικῆς』という．現存する最古写本には単に『材料について Περὶ ὕλης』という題名が付されているが，元々は題名のない著作であった可能性が高い．紀元後65–75年頃に書かれたものと推定されている．

ヨーロッパではディオスコリデスが，テオプラストスやガレノス以上に好んで読まれ，15世紀以降，繰り返しラテン語で出版され，医薬書の権威となった．ルネサンス期以後の著名な植物学書，例えばオットー・ブルンフェルス（1488–1534）の『薬草写生図譜』やレオンハルト・フックス（1501–1566）の『薬草誌』もディオスコリデスの記述に多くを負っている．また，アラビア医学との関係ではイブン・スィーナー〔アヴィセンナ〕（980–1037）の『医学典範』にはディオスコリデスを典拠とした記述が多数含まれている．ディオスコリデスの『薬物誌』は，ヨーロッパ植物学・薬学の源流とも言うべき重要な著作である．

この書の翻訳として，日本ではこれまでエンタプライズ社の『ディオスコリデスの薬物誌』（鷲谷いづみ訳）が一般に用いられてきたが，この翻訳の底本は1655年にJohn Goodyerが英訳したものをさらにRobert Guntherが校訂したものであった．日本語訳はこの英訳からの重訳という原典からは程遠いもので，また参照項の番号が異なることも相まって，研究者が使用するには甚だ不便な本であった（さらに大判で持ち運びには不向きで，価格も高く，市場への流通も非常に少ないという難点もあった）．今回出版された岸本良彦氏による翻訳はMax Wellmannのギリシア語校訂本を底本としたディオスコリデス『薬物誌』の日本初のギリシア語原典翻訳である．

本書の底本であるWellmannの校訂本について，若干補足をしておくと，これは1906–1914年にかけて出版されたもので，全5巻（3分冊）に及ぶ．現在われわれが利用できる比較的信頼度の高い校訂本の一つである．「比較的信頼度の高い」という言い方をしたのは，近年John Riddleの研究により，Wellmannが写本校合で特に依拠した諸写本と

は別系統の諸写本の存在が指摘されており，ディオスコリデスの『薬物誌』は，実際にはWellmannが想定していたよりも遥かに複雑な写本伝承を経ていることが明らかになっているからである．写本の数にも大幅な見直しが必要で，Wellmannが言及した写本は30ほどであるが，Alain Touwaideはその6倍から7倍の数の写本を報告しており，完全な校訂本の作成には今後数十年かかるものと想定されている．こうした最新の研究動向にも言及があれば，読者が本書から発展的に研究を進めていく上での助けとなったであろう．

本書はまず，Wellmannが第2分冊の冒頭で記述したラテン語序文の翻訳を掲載する．これはWellmannが校訂の際に用いた中世諸写本の書誌的考察を要約したもので，西洋古典学研究者には極めて重要な情報である．ただし，読者はこの情報が第一次大戦以前の状態を記録したものであることに留意されたい．例えば，ここでVindobonensis suppl. gr. 28として紹介されている写本は，現在はウィーンになく，1919年にナポリへ返還されており，通常ナポリ写本Neapolitanusと呼ばれる．また，評者が確認したところ，現在では諸写本の状態もかなり悪化し，ここに記載されているようには判読できない箇所が多数みられる．

本書の構成は次の通り．第1巻：芳香類，油，香油・香膏，樹木の露滴，樹液，木の実，第2巻：動物，昆虫，甲殻類，爬虫類等，乳および乳製品，獣脂あるいは脂肪，穀物，野菜，刺激性のある植物，第3巻：根，液汁，草本，種子，第4巻：ここまで取り上げられていなかった薬草，根，第5巻：（ブドウ酒の原料となる）ツル植物とブドウ酒，果実酒，鉱石等．記録された植物は約600種，生薬は約1000種に及ぶ．とくに第5巻ではブドウ酒醸造技術や医薬品として利用可能な鉱物の採掘場所に関するディオスコリデスの深い見識が示されている．

古代医学書の翻訳における大きな困難の一つに，現代では同定不可能な植物や病気の名称をどのように翻訳するかという問題がある．本書は比較的日本語でも親しみのあるものには日本語名，そうでないものはギリシア語のままカタカナ表記にし，注で可能性のある植物の学名を明記するという形がとられ，一般読者に馴染みのない学名の羅列を回避している．注は極力簡潔にまとめられ，見開き頁を跨がずに掲載されている点も読者に対する配慮がなされている．

訳者あとがきとして収められた解説も多くの示唆に富む．これはディオスコリデスの1）生涯，2）思想的背景，3）著作，4）植物の同定というテーマを扱う．1）の生涯は，ディオスコリデスが軍医であったのか否かというしばしば研究者間でも議論される問題を取り上げ，最新の議論にも触れる．2）の思想的背景は，特に訳者の力が込められており，ディオスコリデスとタレントゥムのヘラクレイデスおよびアンドレアスとの関係，さらに方法学派の医師たちへの考察まで含めた重厚な論考となっている．3）著作は，別の作品『単純薬論（περὶ ἁπλῶν φαρμάκων）』の紹介や『薬物誌』とプリニウスの『博物誌』の関係を論じる．ただし，『単純薬論』が「現在では真作とされている」と記述されているが，現在この作品研究の第一人者であるJohn Fitchはこれをディオスコリデスの偽作とみなし，関連する論文を1本（Fitch, J: Textual Notes On Ps.-Dioscorides, On Simples. Classical Quarterly 71: 285–291, 2021），単著を1冊（Fitch, J: On Simples, Attributed to Dioscorides. Brill: Leiden. 2022）出版している．いずれも最新の研究で本書の入稿前には入手できなかったとも思われるが，真作性の疑義については，様々な研究者によって指摘されてきた（例えばRiddle, M: Dioscorides on Pharmacy and Medicine. Austin: University of Texas Press. 1985）．4）の植物の同定では，同定に際してJacques Andréの研究書（古代の植物の同定に関して，現在大半の古典学研究者はこれに依拠している）のみならず，インターネットも駆使して種別を確認し，できるだけ読者に違和感のない形で提供しようとした訳者の苦心が窺える．

巻末に収められた索引はギリシア語原語，日本語，ラテン語学名を収録した労作で，本訳書の価値を大きく高めている．エンタプライズ版にあったような植物の挿絵がこの本に収められていないことに不満をもつ読者もいるかもしれないが，イ

ンターネットが普及した現在，各自がより正確な画像を容易に手に入れられることは訳者の指摘する通りであり，評者としてもこの考えに深く賛同する．

総じて，難解なディオスコリデスのギリシア語原典を一人の手で翻訳した訳者の功績は最大の称賛に値する．これまでディオスコリデスに関心を寄せつつも，ギリシア語に通じない医史学研究者は，もっぱらLily Y. Beckの英訳，あるいはMax Aufmesserの独訳に依拠する他なかったが，これを日本語で参照できるようになったのはこの上ない喜びであろう．研究者必備の一冊であるのは勿論，一般読者にも広く手にしてもらいたい書である．またこのような書を良心的な価格で提供してくれた八坂書房にも一読者として心から感謝申し上げたい．

（福島　正幸）

［八坂書房，〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町1-4-11，TEL. 03（3293）7975，2022年3月，菊判，518頁，7,800円＋税］

適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会 編
『（緒方洪庵全集第五巻）書状（その二）その他文書（附）適塾姓名録』

本書は，大阪大学適塾記念センターの適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会の編集にかかるものであり，大阪大学出版会から発行された．評者の研究経歴は大阪大学とも，適塾記念センターとも，緒方洪庵とも無縁の者であり，評者として不適格の誹りを免れないが，対象となる良書に免じて寛容を請いたい．

本書はこれまで大阪大学関係者によって継続されてきた緒方洪庵研究の決定版と呼ぶべきものと見える．そこで，最初に大阪大学と適塾の関係，および阪大関係者による適塾研究の軌跡について概観しておこう（『よみがえる適塾』『続洪庵・適塾の研究』等参照）．

緒方洪庵（1810～1863）が幕末大坂の過書町（現中央区北浜）に営んだ適塾は，明治以降も基本的に緒方家の手で維持されてきたが，1940年大阪府史蹟指定，1941年国史蹟指定を経て，1942年に大阪帝国大学に譲渡され，戦時下には医学部教官・学生によって使用され，辛くも戦火を免れた．現存唯一の蘭学塾遺構として1964年に国の重要文化財に指定され，1976年から解体修復工事に着工．近年も耐震工事などの補強整備事業が続いているとのことである．

その顕彰活動に関しては，戦後1948年に大阪帝大に法文学部が増設されると，初代国史学講座教授に着任した藤直幹（1903～1965）が1950年代に緒方洪庵と適塾に関する先駆的な研究業績を発表する．同じ頃，適塾出身者を祖父に持つ医学部教授藤野恒三郎（1907～1992，微生物病学）が顕彰活動に意欲を持ち，彼らの牽引によって1952年に適塾記念会が設立され，会誌『適塾』も創刊される（1956～59）．60年代に適塾記念会は一旦途絶したが，藤教授の歿後はその高弟で後継の国史学教授となった梅渓昇（1921～2016）が活動を継承し，また理学部教授芝哲夫（1924～2010）らも加わり1973年に適塾記念会が再開される．

一方，洪庵の直系子孫にあたる緒方富雄（1901～1989）は東京帝大医学部在学中の大正末年から洪庵研究に着手し資料調査を継続していたので，藤野恒三郎・梅渓昇らが働きかけ，緒方富雄・適塾記念会共編による『緒方洪庵のてがみ』全3巻の編纂が始まる．緒方富雄が巻1・2を刊行（1980年，菜根出版）して病没した後，梅渓はこれを継承して巻3（1994年）を完成．更に巻4・5（1996年）まで続刊した．全5巻に収録された洪庵書簡は252通を数える．梅渓は『緒方洪庵のてがみ』全5巻完成後，2002年の適塾記念会創立50周年を機に，藤野恒三郎以来の同会の宿願である『緒方洪庵全集』の編纂を提起した．

本書巻頭の「『緒方洪庵全集』の刊行計画について」（島田昌一編集委員長・村田路人編集長）によれば，刊行計画が本格化して適塾記念会緒方洪庵